

第50話 スタジオ夜話 (番外編)

サウンドドラマの制作

(音の入り口) マイクロフォンⅢ

☆はじめに

新緑の美しい季節になりました。今年は例年に比べ5月から夏日が数日続きました。本番の夏はまだですが暑くなりそうな予感がします。熱中症などお気を付けください。さてスタジオ夜話番外編サウンドドラマ制作も音源から収録、マイクロフォンのお話と続きマイクロフォンのⅢとなりました。構造的分類、使用目的からの分類と進み今回はマイクロフォンの扱い方からお話をします。お付き合いください。

☆マイクロフォンの扱い方具体的には三つのステップを考える

1) Arrangement

日本語でアレンジ、意味としてはいくつもありますがサウンドドラマ制作マイクロフォンの扱い方では準備するの意味で使います。2) Setting 言葉通りマイクロフォンの収録セッティングのことです。3) Work 役者さんのマイクロフォンに対する動きだけでなくエンジニアのフォローも含む作業をいいます。

☆マイクロフォンの具体的扱いは大きくこの三つが基本です。

1) マイクロフォン・アレンジ

Microphone arrangement

収録にあたってのマイクロフォン選択が主となる作業です。収録する音に適したものを選択するのですが音楽CDなどの制作収録時とはずいぶん違います。収録した音の使われ方がセッティングとも連動するのですが重要です。例えば音楽収録ではありえないコモッタ?音や歪んだ音として収録する必要もあります。MIX時に加工することも想定しての収録ですがクリアで綺麗な音で収録するよりもある程度出来上がり

を予測してマイクロフォンを選択する方が賢明です。また収録対象となる音源によってはその収録環境に合わせた選択も必要となります。

以前台詞収録のところでお話したのですが設定空間を含めて収録することを考えると一つの音源に対して複数のマイクロフォンを組み合わせることも考えられます。こうした収録用マイクロフォンの選択や準備をスタジオ夜話サウンドドラマ制作ではマイクロフォンアレンジメントと言います。

基本的なマイクロフォンの選択をご紹介します。一般的な選択とはチョット異なりますがスタジオ夜話的には基本となります。・台詞収録に関係してのアレンジ・ステレオ収録を例にしてお話をします。

台詞そのものをステレオ作品で収録する場合モノラルで収録してセンターや任意の位置にパンポットなどによって定位させる。この場合でも高性能なオールマイティなコンデンサータイプのもので収録するばかりでなく例えば独り言やモノログなどの収録にはヴォーカル用のスーパーカーディオイド系を使うことでより近接感が表現できます。かつて使用していたリボンタイプとはニュアンスは違いますがその近接感はあきらかです。空間性を意識したマルチマイクロフォンの収録でもオールマイティなコンデンサータイプのもので併用して使うことをお勧めします。その時空間性を確保する為のマイクロフォンは設定シュチュエーションによっても様々でバウンダリーマイクロフォンなども候補に挙がってきます。自然な登場人物どうしの関係を収録するにはMS方式などシステムマイクロフォンの併用も考えられます。台詞収録には高性能なコンデンサーマイクロフォンという考えだけでなく想像(創造)力を働かせて取り組むことも大切です。前回紹介した万能収録BOXに反射性の板などと無指向性マイクロフォンを二本仕込むと隣の部屋の会

話などあまり労を要せず収録ができます。

2) マイクロフォン・セッティング

Microphone setting

サウンドドラマ制作の収録作業で最も重要な作業がマイクロフォンセッティングです。この作業が作品のシュチュエーション設定に大きく影響します。収録環境も重要です。スタジオ調整室では聴取者の試聴環境を意識した準備が必要です。聴取者がそれなりの部屋で聴取するのか?あるいはヘッドフォンなどで聴取するのかなどエンジニアや演出家など一応モニター出来るように対応することが大切です。またそうした環境が確保できない野外ロケなどではエンジニアの経験などが重要視されます。それを前提にお話をすすめます。

単独マイクロフォンでの収録ではあまり意識しなくともよいのですがマルチマイクロフォンでの収録では音楽収録とはまるで違った考え方が必要です。音楽収録の教科書?では各マイクロフォン間でのカブリは禁物、対象となる音源を確実に確保、音質重視というのが鉄則です。

サウンドドラマ制作では目的にあった音を収録するためにはカブリは重要、曖昧な音としての収録も有りといったことは常識です。音源に対してそっぽを向いたマイクロフォンが林立します。音楽録音ではオーケストラを例にすれば楽器位置はおおよそ固定できていますがサウンドドラマ台詞収録では登場人物には動きがあります。またマイクロアレンジメントで選択したマイクロフォンには使用上の制約もあります。結論からいうとモニターしてみないとわからないのです。勿論基本はエンジニアの経験値から行いますがスタジオ収録台詞を例にすればまずはスタジオ内で登場人物に演技してもらうことから始めます。スタジオでのドライリハーサルと同じです。エンジニアはこの時その声の出し方や登場人物の動き、空間的關係性を観察して順次マ

イクロフォンをセッティングしてゆきます。セッティングしたマイクロフォンの ON/OFF やグループ分け、それぞれの収録レベルのセッティングも必要となってきます。今日的なデジタル音声調整卓は音楽録音よりもこうしたセッティングに強みがあります。アナログ時代には不可能な収録セッティングが可能となりましたいずれにしてもモニターしながらのカットアンドトライの手間がかかる作業です。是非マイクロフォンセッティングに時間をかけより良い作品創りを願います。

3) マイクロフォン・ワーク

Microphone work

マイクロフォンワークは動きのある音の収録には欠かせません。この場合動きのある音とは音自体に動きがあるものではなく役者が動く、あるいはマイクロフォンの移動による動きのことです。(MS マイクロフォンなどで使うディレクションミキサー操作などは調整卓操作などで紹介) 効果音音源など小道具的な物の移動も含めます。登場人物役者が演技上動く当然マイクロフォンで収録する台詞は一定の音として収録はできません。例えばステレオペアマイクロフォンで収録するとき左右のマイクロフォンをそのままパンポットで左右に振り分けると定位間がかなり左右に不安定になります。そこでパンポットの振り分けを狭くセッティングするのですが他の出演者との空間性が損なわれることにもなります。そこでセッティングの問題とも関係してくるのですがセッティングを含めてのマイクロフォンワークと考えるのならステレオペアマイクロフォンを2組用意することを検討します。

一組のペアで基本的な空間性を担保したセッティングを行いアクションを伴う台詞定位位置にもう一組のペアマイクロフォンをセッティングしてパンポットの振り分けレベル調整をして役者さんにその使い方を



説明といった方法も考えられます。エンジニアの経験と技量、カットアンドトライの成果が問われます。

また出演者（マイクロフォンの場合もある）の移動による移動シーンの設定ではかつての ON 移動という手法、マイクロホンの前を OFF から ON そして OFF へといった台詞など出演者が動くこと、そしてその音に対し一定の足音や台詞といった動かない音の組み合わせで主たる登場人物の移動を表現していたマイクロフォンワークなども今日的には応用は様々です。筆者はかなり以前よりこうした場面ではロケを中心にやってきました。出演者にはロケに参加してもらうのが前提です。指向性の鋭いショートガンのペアとピンマイクロフォンの組み合わせで収録します。マルチ収録できればベストです。ペアマイクロフォンを持つエンジニアと役者が一緒に商店街や夜店の間を歩きます。最近では小型のデジタル録音機やイヤホンタイプのモニターがあるので現場ではほとんど目立ちません。目立つこと前提ならダミーヘッドなど利用するとかかなり効果が上がります。

上野動物園にパンダが来て間もなくのころ実際に御徒町アメ横のにぎわいの中を歩く登場人物という設定を収録した際にはノイマン製ダミーヘッドとマイクロフォン用電池電源 BOX、ピンマイク 2 本台詞用（出演者 2 人）、SONY 製 EM3 改造 4 トラックとの組み合わせで収録、自作 MIX ヘッド

フォンアンプでモニターしながら収録したこともあります。頭内定位した台詞と頭外に広がる情景がかなりリアルな音でスピーカー再生でも十分な臨場感であったと今でも記憶しています。まさに役者さんとエンジニアの共同作業によるマイクロフォンワークです。

☆サウンドドラマ制作マイクロフォンを使った作業

マイクロフォンの扱い方を三つのステップでお話ししました。互いの作業は正確に区分できるものではなく綿密に関係しています。目的は一つです。音楽収録とはかなり違った考え方や手法でしたがサウンドドラマ制作にあたっては目的に合わせた想像を働かせて工夫して収録してください。期待しています。

☆次回

3 回にわたりマイクロフォンについてお話しをしました。今回は若干ですが具体的なお話しができたのかなと思っています。マイクロフォンの使い方などは奥が深くとても語りつくせないのですが機会を見て補足することとして次回はサウンドドラマ制作のミキシング、調整卓を考えることにします。またお付き合ひください。

— 森田 雅行 —